

# ニュースレター



北海道大学 高等教育推進機構

Newsletter No. 106

- 学習への動機づけを行う授業スキルワークショップを  
開催 (9ページ)
- 講演会「英語によるアカデミックプレゼンテーションの  
基礎」を開催 (14ページ)
- 北海道大学卒業生調査2015の結果 (17ページ)
- 経済同友会と連携した長期インターンシッププログラムの  
実施 (19ページ)
- 第88回サイエンス・カフェ札幌「カエルの先生時計作り  
の達人に迫る～時の小宇宙を生み出す独創性の解明～」  
開催報告 (24ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

## 巻頭言 FOREWORD

### 「社会との対話・協働」に関する研究開発

高等教育推進機構 高等教育研究部 高等教育研究部門 三上 直之

#### 高等教育研究部門の使命

高等教育研究部門は、高等教育における将来的な諸課題に関する研究と、具体的な問題解決を使命としています。この二つをつねに車の両輪として意識しつつ、教育制度改革や入試改革、授業法の改善、研修プログラムの開発、教育評価、生涯学習、地域連携などの多様なテーマに、部門所属の教職員が臨機応変にチームを構成して取り組んでいます。

この部門に着任して9年目になりますが、大学教育の現場における課題解決の実践と、それを中長期的に支える研究開発に同時に携われる環境は、この部門の魅力であり、組織的にも大きな強みであると感じています。そ

うした中で、私自身が主に担当してきた研究課題の一つに、「大学と社会の間の対話・協働の促進」というテーマがあります。

大学の教育研究の成果を外部にわかりやすく発信して説明責任を果たすとともに、高等教育や学術研究に対して社会各層から寄せられる期待や懸念を的確にキャッチする双方向コミュニケーションが強く求められています。今年策定された政府の第5期科学技術基本計画もこの点を改めて強調しており、大学や公的研究機関は、研究者が社会と向き合う場、多様なステークホルダー（利害関係者）と対話・協働する場を創造する必要があると、明確に述べています。人文社会系の諸分野でも事情は同じです。こうしたトレンドにいかに対処し、社会的責任を果たしていくかは、本学のように研究と大学院レベルの教育に重点を置く大学にとって、将来にわたる最重要課題の一つです。

## サイエンスカフェの先へ

社会との対話を促進するため、ここ10年ほどの間に各地の大学に普及した取り組みに、サイエンスカフェがあります。本学でも、CoSTEP（オープンエデュケーションセンター科学技術コミュニケーション教育研究部門）が、2005年から札幌駅前の書店で定期的を開催し、科学技術に関するオープンな対話の場を提供しつづけています。私も以前、CoSTEPに勤務しており、草創期にあった本学のサイエンスカフェの企画運営を約4年間、担当しました。

サイエンスカフェは、気軽に話したり交流したりという場をつくるには適していますが、対立を含む込み入った話題について突っ込んで話し合ったり、合意形成したりするには、異なるやり方が必要です。科学技術基本計画でも、サイエンスカフェが挙げってきた成果に触れつつ、「多様なステークホルダーを巻き込んだ円卓会議、科学技術に係る各種市民参画型会議」などをさらに充実させる必要性が指摘されています。このような手法を大学が先頭に立って編み出し、対話・協働の場を創造していくことが期待されているのです。研究部門では、大学がこうした社会的要請にこたえる方法を明らかにすべく、基礎的・応用的研究に取り組み、成果を学内外に還元してきました。

## 科学技術への市民参加の手法開発

その一環として、科学技術に関する市民参加の手法開発を、科研費など複数の外部資金を継続的に獲得して進めてきています。2011年には、「討論型世論調査（DP）」手法を、科学技術に関する対話・協働の手法として応用する可能性を探るため、CoSTEPと共同で、札幌市や北海道新聞、米国スタンフォード大学などの協力を得て、BSE（牛海綿状脳症）問題をテーマに市民3,000人を対象とした社会実験を実現しました。この実験は、科学技術コミュニケーションの分野にDP手法をいち早く導入する試みであり、翌年には、福島原発事故後の国のエネルギー戦略を策定する際、同手法が公式に採用されるという展開もみえました。

また、バイオテクノロジーやナノテクノロジーなどの萌芽的科学技術について、ステークホルダーの対話・協働を促す手法も研究しています。

これらの研究を通じて得た知見やノウハウの還元にも積極的に取り組んでいます。文部科学省や環境省、北海道、札幌市を始めとする行政機関等に対して、各種委員会への参加や共同研究を通じて、対話・協働の進め方や、リスクコミュニケーションに関する知見を提供しています。学内の部局等や研究者による対話・コミュニケーション活動への助言も、随時行ってきています。

一昨年には、一連の活動に対して、「科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞（理解増進部門）」を、杉山滋郎名誉教授（CoSTEP前部門長）らとの連名で受賞しました。

## 大学公開講座の研究

「大学と社会の間の対話・協働の促進」という課題のもとで、2年ほど前から力を入れているのが大学公開講座の研究です。

大学の生涯学習支援の機能や、地域連携、社会貢献のあり方を実践的に研究する場として、当研究部門では従来から、毎年7月に開催される「北海道大学公開講座（全学企画）」の企画運営を学務部とともに担当しています。この公開講座は、40年前に始まって以来、研究総合大学が全学をあげて実施するのにふさわしい広がりや深みを持つものとして、多くの地域住民にご参加いただきました。この蓄積を生かしつつ、さらに社会との対話の窓口として

発展させるため、本学の中期計画や近未来戦略に即した全学型公開講座のあり方の研究を進めています。

受講者アンケートの詳細な分析に始まり、他の国立総合大学を訪問して公開講座の状況を直接ヒアリングするなどの調査も行っています。調査からは、我が国の研究総合大学において全学型公開講座が社会貢献、地域連携の主力プログラムであり続けており、その位置づけが高まっている状況も見えてきました。

こうした結果を踏まえて、本学の全学公開講座でも、従来は平日夜間のみだった日程を、一部休日の昼間に移動して若年・中年層の参加に便宜を図るなどの改革を、全学の教員で構成する公開講座実施部会でもご議論を頂きながら進めています。また今年度は、全学教育の一般教育演習（フレッシュマンセミナー）「聞く力・話す力のトレーニング」という授業の一環として、本学の1年生たちが、公開講座の舞台に立って案内役を務めるという実習も始めました。地域の方々に、本学の研究のみならず教育の一端もご覧いただく機会をつくれればという意図を込めての試みです。学生たちの初々しいプレゼンテーションは、幸い受講者からも好評をいただい

ています。

## 対話・協働の研究センターとして

ここでご紹介した研究と実践は、大学院レベルの教育と連動する形で行われています。私も含め当研究部門の専任教員のうち5人が、理学院自然史科学専攻科学コミュニケーション講座で修士課程、博士後期課程の教育を担当しています。科学と社会との対話・協働のあり方に関する専門人材の養成にも、同時進行で取り組んでいるのです。

学術のオープン化の必要性が叫ばれる昨今、大学と社会の間の相互作用を自己言及的に教育研究の主題とすることは、とりわけ研究に重点を置く大学にとって、ますます期待されるようになってくるものと思われます。国内外の主要な研究大学が、科学と社会との関わりについて、大学院レベルを含む教育と実践の役割を伴った研究センターを持つようになってきていることは、その現れと言えます。高等教育研究部門は、本学におけるそうした機能の一翼を実質的に担ってきており、今後、他の研究テーマともさらに有機的に関連させつつ、この課題に関する研究開発を展開していく必要があると考えています。

## 教育支援 EDUCATIONAL SUPPORT

### TA研修会開催される —180名が修了—

2016年度のTA研修会は、4月5日（火）に機構の大講堂を主会場として開催されました。全学教育を担当するTAに対しては、当該授業料目の担当教員によるオリエンテーションのほかに、事前に当該業務に関する適切なオリエンテーションが義務づけられています。高等教育推進機構では、平成10年度からTA研修会を実施してきており、今回で19回目となります。今年度の全学教育におけるTA採用人数は、のべ1,194名（対前年度比10%減）です。のべ時間では1.1%減少（36,083時間）しています。TA制度は広い意味の大学院教育の一環として導入された制度で、教育を学ぶための実地訓練（教育現

場の体験）を行う制度ともみなされています。また、大学院学生は教員とともに学部教育に参加することによって、自分の専門についてより一層理解を深めるとともに、教育の現場において教えるとはどういうことかを理解することもできます。昨年度から博士後期課程の学生を対象に導入されたTF制度の前段階としての意義もあります。

研修の目的は以下のように要約されます。

- 1) 大学教育の基礎を理解する
- 2) 全学教育の趣旨を理解する：  
目的、意義、全体での位置づけ
- 3) 専門教育に還元できない基礎的な教育技術、心

- 構え、教育理論について理解する
- 4) 担当する科目の内容と教授法を理解する
- 5) TA相互の交流をはかる
- 午後の分科会は13分科会になりました。すべてを

修了した参加者は180名でした。55名は午前か午後  
の一方にしか参加できませんでした。なお、今年度  
は例年実施していた昼休みのコーヒープレイクは設  
けませんでした。

表1 平成28年度北海道大学全学教育TA研修プログラム

〈午前の部〉	〈午後の部〉
9:30 挨拶：高等教育推進機構長	(A) 一般教育演習
9:35 講演「北海道大学の全学教育について」 鈴木 久男 総合教育部長	(B) ラーニングサポート
10:05 講演「TAの心得」 瀬名波栄潤 (文学研究科)	(C) 講義
10:35 休憩	(D) 論文指導
10:45 「TA業務にともなう事務手続きに関する説明」 原田奈緒子 (教育推進課)	(E) 情報学
11:00 パネルディスカッション「TAの業務と役割」	(F) 英語Ⅱ オンライン授業
司会：山本 堅一 (高等教育推進機構)	(G) 英語Ⅱ 以外の英語の授業
教員パネリスト：山田 邦雅 (高等教育推進機構)	(H) 初習外国語 (中国語以外)
院生パネリスト：小泉 光世 (理学院)	(I) 中国語
高橋 亮輔 (情報科学研究科)	(J) 文系基礎科目
李 雅旬 (国際広報メディア・観光学院)	(K) 心理学実験
	(L) 自然科学実験
	(M) 体育学

修了後回収したアンケート総数は246で、修士165  
名、博士60名でした (総和が総数とならないのは記  
述がないため。以下同様)。このうち143名は職務の  
内容を知っていますが、89名はこの時点では知りま  
せませんでした。57名のTAが成績判定に参加するそう

です。29名はこれ以外のTA研修を受けています。  
午後のセッション以外で、有益であったと記述が多  
かったのは、「TAの心得」および「パネルディスカッ  
ション」でした。

(細川 敏幸)



写真1 鈴木先生による講演の様子



写真2 パネルディスカッションの様子

## 各分科会の報告

### A 一般教育演習

一般教育演習は履修者が23名に絞られる、事実上  
のアクティブラーニング科目です。そのため、本分  
科会ではグループ学習の理解を主眼としています。  
24名のTAは4グループに分かれてグループ学習を  
体験し、そのファシリテーションの方法を学びまし

た。グループ討議のテーマは、実際にTAが直面す  
るかもしれない問題となっており、その対応と防止  
策について議論を行いました。各グループは、まず  
問題の原因を探ること、そして担当教員に報告する  
ことを基盤として、さらに新たな方法を提案してい  
ました。全体発表・質疑応答は30分の予定だったと  
ころが50分に延長されたことからわかるように、

非常に活発な議論が展開されました。

(山田 邦雅)

## B ラーニングサポート

本分科会では、ラーニングサポート室の学習サポートに従事する院生チューターの研修を例年行っています。学習サポートチューターは、通常のTAと異なり、(1) 正課授業とは独立である、(2) 学生とは個別対応の形で接する、という特徴があります。必要とされる能力も幅広く、担当科目の内容に関する専門的知識はもちろんのこと、分かり易く相手に説明する能力、やり取りを円滑にするコミュニケーション能力など対人関係と絡んだ力も要求されます。学習サポートの利用は年間3,000件程度もあり、北海道大学の初年次教育において大きな役割を担うようになってきています。

研修には、チューター採用予定者のうち、昨年度からの継続採用者7名、新規採用者7名の合計14名が参加しました。新規採用者が多いこともあり、まずチューター同士で自己紹介をしてもらいました。出身や趣味、研究内容、チューターという仕事への意気込みなどを他のチューターへ向けて説明することを課して、決められた時間で伝えたいことを効果的に伝える訓練の場を設けました。続いて、担当科目ごとにグループを作り、過去の相談事例や継続採用者の経験の共有を行いました。チューター同士で意見交換や模擬対応を行うことで、対応方法についての不安を取り除いてもらい、対応スキルの向上へつなげられるようにしました。

学生の主体性を尊重し正課外で一对一での対応を行うことになる学習サポートチューターは、対応の難しさや責任の大きさなど、困難な面が多くあります。今回の分科会の内容を通して、実際に勤務を行う上での心構えを養うことができ、また継続採用者の経験をチューター全員で共有するための良い機会になったのではないかと思います。

(清水 将英)

## C 講義

講義分科会は、まず大講堂に集合しマニュアルを参考資料にして、細川のミニレクチャーによりTA制度の歴史と意味、シラバスの読み方、講義の基礎手法、グループ学習の手法を学びました。次に

N282, N283教室に移動し、それぞれ41名、35名の参加者を4、5グループに分け、細川、飯田と、亀野、三上が担当し、グループ学習によるケーススタディを行いました。はじめに、アイスブレイキングによりグループ内の自己紹介と役割分担を確認し、「落ち葉の使い方」でグループの動きを会得しました。次に「出欠を学生証のリーダーで確認している講義を担当した。学期の終わり近くになって、5回目と7回目に出席したが学生証をかざすことを忘れたとの申し出がTAの菅君にあった。菅君はどうすべきか。」など、6種類用意した起こりうるケースのうちの一つについて、どう対応すべきかを議論しました。各グループとも熱心に課題に取り組み、最後の発表ではTA、教員、学生それぞれの立場を場合分けして考えるなどしたわかりやすい解決策が提示され、有意義な研修となりました。(細川 敏幸)

## D 論文指導

高校までの作文教育、大学教育の目的と論文指導の課題などについてのレクチャー、および、参加者自身がこれまで受けてきた論文指導をどのように受けとめているかについて作文してもらい、その内容に基づいてグループ・ディスカッションを行いました。TAが考える「よい論文指導」は、論文の構成や技法について基本知識を伝える、書き手の意図を理解して行う、複数の目を通すなどでした。これらを行うには、学問的なベースを共有することも必要ですが、全学教育は必ずしもそうした条件が整っていません。TAには、教員と学生の仲介や、学生にとってのメンターの役割が期待されていると言えるかも知れません。(光本 滋)

## E 情報学

情報学では、1年生を対象に、前期に情報学Ⅰ、後期に情報学Ⅱの2科目を開講しています。この中で、前期の情報学Ⅰは、必修の授業であり、約2,600人の入学生を20人程度の小グループに分けて授業を統一カリキュラムで実施しています。1コマに6-10教室並列して授業を行うため、複数のTA(もしくは非常勤講師)が、学生に直接、相対して指導・助言等を行います。情報学Ⅰは、50名超のTAを有する科目であり、TAが学生に対し、課題の目的や手順などの明確な指示を与える必要があります。

TAが多いため、TA自身の質問対応やコマ全体の授業実施を補佐する役割として、SタイプのTAを各コマのTAの勤務者数に応じ、1-2名つけています。

本分科会では、初めて情報学を担当するTA、TF、新たにSタイプのTAとして勤務するTA他、TA全体と非常勤講師が一堂に会し、本年度の情報学Iの目標、内容、実施指導体制、教材、成績評価の概略の説明と具体的な評価項目の説明を行いました。

本年度は、情報学における新規の学習項目として、履歴情報の抽出等を試し確認するようなデータベースの課題、音教材を事前に確認させた上での音のデジタル表現に関する説明と実習等、新規要素を組み込みながら、毎年、授業を企画・実施しています。これらを綿密なスケジュールで組み込み、授業が構成されているため、その内容の概要を理解することが、本分科会におけるゴールの一つとなっています。

情報学では、140もの多数のグループが統一カリキュラムで授業を推進しています。統一カリキュラムを行うことによる優位性と、公平性を担保することの重要性などの担当者の心構えに触れました。また、評価の際のルーブリックの見方などの説明も行いました。

分科会終了後には、TF全員ならびにTA(Sタイプ)が一堂に会し、より良い授業進行についての情報共有と授業時のサポートについて、意見を交換しました。TAの指導力育成にもつながる本科目でのTA経験を通しTA全員に、主体的に授業に関わっていただく予定です。

(布施 泉)

## F 英語Ⅱオンライン授業

The English Online team heavily relies on technology to coordinate and facilitate the teaching our 2611 freshmen. We have 5 instructors, 13 TAs, 2 email mailing lists, 2 online learning systems, 4 CALL (computer aided language learning) classrooms, and 240 student computers.

Our students are fresh into college. During their first week, they are unfamiliar with the location of buildings and classrooms. Our initial responsibility is to acclimatize our students to life at Hokudai.

During the first 2 weeks, we arrive at our classrooms 30 minutes before start of class so that we can assist students who arrive early and often need help.

Our TA training session took place on 2016-04-05 from 13:00 to 16:00. Our session was fully attended by our TAs and instructors.

Our TAs toured our 4 classrooms and 2 administrative offices where they will teach and work. Our TAs learned how to prepare the classroom: that is, unlocking doors, adjusting lighting and air conditioning, launching the instructor consoles, showing slides on projectors and center monitors, and placing handouts on desks near the doors. Our TAs practiced conducting classes: meeting and greeting students, demonstrating procedures, explaining courseware, and maintaining order within the classroom.

Most importantly, our TAs and instructors began to bond. Our mutual trust is essential in running our course, and also in helping our TAs grow as mentors and educators.

(Goh Kawai)

## G 英語Ⅱ以外の英語の授業

英語Ⅱ以外の英語の授業を担当するTAのための分科会は、午後1時半より高等教育推進機構2階E203教室に集合して行われました。英語Ⅱ以外の英語の授業については、業務内容が授業担当教員の方針により千差万別であるため、全体に関係すると思われる大まかな説明・案内を中心としました。外国語教育センター管轄の英語授業のTAの世話役は、この研修会をもって園田から眞崎睦子先生に交代することが決まっていたため、まずそのお知らせと新担当者の紹介を行ないました。英語TAを行うにあたって留意すべき点についてマニュアルを参照しながら、口頭で注意喚起を行ないました。続いて、全学教育事務に全員を案内し、レポートボックス、帳簿や視聴覚機器の鍵の場所、機材の借り方などを確認してもらい、続いて全学教育スタッフ室にも案内しました。そこで、アンケートへの記入と名札の回収、個別の質問への対応をして、分科会を終了しました。

(園田 勝英)

## H 初習外国語（中国語以外）

最初にTAの担当外国語・授業科目の確認をしました。独語のCALL必修授業担当者には、9月に開催される講習会への出席が不可欠である旨を伝えました。

次に外国語TAが一般に気をつけておかなければならない注意事項を説明しました。服装や立ち居振る舞いの注意点、教室内では常に学生に見られていることを意識し、不適切な振る舞いをしないように注意しました。母語話者TAには、母語話者として期待されている役割について確認しました。必修CALLのTAに対しては、教員のいない自学自習の監督における要領等を伝えました。

最後に全学教務の出勤簿の場所まで案内しました。

(西村 龍一)

## I 中国語

中国語のTAは例年、基本的にはほぼ全員が中国語母語話者の留学生によって担われています。今年度も多数の留学生から応募があり、書類審査や面接を経て、新規だけで20名を超えるTAを採用しました。

これら新規TA向けに開かれた午後の分科会では、午前の全体会の要点を再度確認した後、中国語科目個別の業務や心構えを説明しました。特にTAが母語話者であるという特性を生かして、授業中、発音のお手本や学生との対話練習補助といった業務を行うほかに、積極的に学習者の語学能力や動機づけ向上を支援し、さらには中国語圏の文化・社会への窓口としての役割を担うことが求められると強調しました。

東アジア圏における人的交流が密接になる中、英語以外の外国語として中国語はますます重要性を高めつつあります。留学生にTA（及びTF）として活躍し、日本人学生と交流を深められる場を継続的に用意することの大切さを、あらためて感じさせられた研修会でした。

(清水 賢一郎)

## J 文系基礎科目

今年度の「文系基礎科目」分科会には、理系のTA予定者も2名加わって、参加者数は合計11名でした。前半は、多人数講義におけるTAの役割について、C分科会のレクチャーを受けてもらいました。

後半では、基本的なTAの業務内容や心構えについて説明した後、現在の国立大学法人がおかれている状況を解説し、昨年、喧しい議論をひき起こした文部科学省の通知「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しについて」（2015.6.8）をテーマに、人文社会科学系の学問は「役に立たないが、価値はある」、という考え方を論点にフリートーキングを行いました。

TA研修にはあまり馴染まないようなこの問題に考え込みながらも、参加者全員がしっかりと自分の意見を述べ、予定の時間をかなり超過しました。「役に立たないのに価値がある、と強弁するのはおかしいのでは」、「自分の経験から、文系も理系的な基礎が必要だった」、そもそも「文系・理系という分け方はもう通用しないのでは」、「文学も芸術も長い目でみれば社会に役立っているのでは」等々、真剣かつ興味深い意見交換になりました。「役に立つ」とはどういうことか、みなさんが主体的に考えながらTAとして働いてくれることを期待しています。

(山田 貞三)

## K 心理学実験

本分科会の参加者は3名でした。ティーチング・アシスタント・マニュアルを輪読しながら、TAの心構え、実験授業の補助として求められること、心理学実験におけるTAの役割、特に注意すべきこと、等について質疑応答を交ぜながら説明を行いました。最後に、この実験授業でTAが直面するかもしれない幾つかの問題に対して、TAがどのように対処すべきかについて討論しました。分科会に参加した学生はいずれも熱心に討議に加わりました。この分科会は、実際の授業で様々な問題に直面した場合に、自分がどのように行動したらよいか、等を考えるよい機会になったと思います。

(田山 忠行)

## L 自然科学実験

全学教育におけるTA研修会の「自然科学実験」分科会は、例年通り、全カテゴリー共通のプログラムとその後「物理」、「化学」、「生物」、「地球惑星科学」のカテゴリー別のプログラムに分けて行いました。まず、共通プログラムは、高等教育推進機構N棟N302教室において、13時30分より45分程度をか

けて、生物担当の小川から各カテゴリー共通で①自然科学実験の概要、②自然科学実験TAとしての仕事、③自然科学実験TAの一般的な心構え、④一般的な安全上の注意の4点について、一般的な説明を行いました。その後、14時15分より、物理(理学研究院 松山秀生先生担当)、化学(地球環境科学研究院 神谷裕一先生担当)、生物(理学研究院 小川宏人担当)、地惑(理学研究院 吉澤和範先生担当)のカテゴリーに分かれ、各カテゴリーの実験室でそれぞれの実習におけるTA業務のより詳細な説明を行いました。具体的には、①各実験について具体的な内容、②各実験について具体的なTAとしての仕事内容、③各実験について安全上の注意点の3点について、パワーポイントスライドを用いて説明しました。(小川 宏人)

## M 体育学

5名のTAを対象に分科会を実施しました。3名は今年度より初めてTAを担当する大学院生でした。分科会前半は体育学の実技科目および講義科目に関する概要説明を行い、その中で特に、実技科目を受講する学生のための安全および救急処置対策を強調しました。その後、質疑応答を通して、体育学の教育目標および運営に関して共通理解を図りました。分科会後半は、会場を体育館に移し、AED(自動体外式除細動器)の管理と使用方法について確認を行いました。さらに、実技科目の開講場所や用具の点検等についてガイダンスを行いました。

(柚木 孝敬)

## クリッカーの使い方入門研修を開催

4月22日(金)16時30分から90分間、情報教育館4階の多目的教室(2)において「理系教員向けクリッカーの使い方入門」を開催し、5大学から22名の教職員にご参加いただきました。

本研修では、代表的なクリッカーソフト「Turning-Point AnyWhere」の基本的な操作方法と授業内での効果的な使用方法について解説があった後、参加者自身がパソコンでクリッカーの問題を作成して問題の作成方法等を身につけるといった内容でした。

5月26日(木)には「文系教員向けクリッカーの

使い方入門」を開催し、4大学から6名の教職員にご参加いただきました。こちらは参加者が少数だったため、クリッカー問題を作成した後、参加者全員でクリッカーを使って回答、講師や他の参加者から問題作成について助言等を行いました。

参加者アンケートからは、「実際の操作を経験できて良かった」「設問の作り方などが特にためになりました」などという声があり、有意義な研修となりました。

(山本 堅一)



写真1 理系教員向け研修の様子



写真2 文系教員向け研修の様子



## 学習への動機づけを行う授業スキルワークショップを開催

5月13日(金)16時30分から120分間、高等教育推進機構S講義棟S3教室において「学習への動機づけを行う授業スキルワークショップ」を開催し、5大学から16名の教職員にご参加いただきました。

本ワークショップでは、学習者の学習に対する動機づけを行うために教員ができることについて解説があった後、参加者自身の授業を振り返り、内発的動機づけを高めるためにどのような仕掛けが不足しているか、どのような工夫が出来るかを考えるためのワークセッションを行いました。

参加者アンケートには「スライドの使用方法や、クリッカー(それに準じるもの)の効果的な使用について、考え直すことができ良かった」、「自分自身の授業の「骨組み」を認識する機会をいただいた」

などといった意見が見られ、有意義なワークショップになりました。

(山本 堅一)



写真1 ワークショップ中の様子

## 新任教員向け研修「知って活用したい北大の諸制度」を開催

5月20日(金)北大に着任して5年以内の教員を対象とした研修「知って活用したい北大の諸制度」を開催し、17部局から29名の教員にご参加いただきました。

本研修は北大に着任後、速やかに知っておきたい諸制度について理解するため、表1にあるスケジュールに沿って行われました。

新任教員向けの研修といえば、本学では1泊2日の宿泊研修(北海道大学教育ワークショップ)が有

名ですが、本研修は元々宿泊研修の中に組み込まれていた内容をスピノフし、新任教員向けの研修をより手厚く行うことを目指して3年前から実施されている研修です。昨年度まではキャンパスツアーとして学内の案内も行っていましたが、2016年度は授業時期に開催することを考慮し、このような形をとりました。開催時期や研修内容等については、今後も検討を重ねていきたいと考えています。

(山本 堅一)

表1 研修スケジュール

13:05	「北海道大学の教育情報システム(ELMS)の利用について」(オープンエデュケーションセンター)
13:40	「出張申請及び物品購入について」(事務局)
14:10	北図書館西棟へ移動
14:25	「教育・研究に役立つ図書館の活用法について」(北図書館)
15:00	各種制度等の紹介 「北海道大学URAステーションの活動について」(URAステーション) 「北大教員が知っておくべき知財制度と学内ルール」(産学・地域協働推進機構) 「授業におけるオープンエデュケーションの活用」(オープンエデュケーションセンター) 「研究表彰制度・教育表彰制度」(事務局)
16:30	終了



写真1 E209教室での研修の様子



写真2 北図書館西棟での研修の様子

## 効果的なグループワークのための ファシリテーション入門研修を開催

5月27日（金）16時30分から2時間、高等教育推進機構S講義棟S5講義室において、講師に高知大学大学教育創造センターの杉田郁代先生を招いて「効果的なグループワークのためのファシリテーション入門」を開催し、7大学から28名の教職員の方にご参加いただきました。

本研修は、学生同士の学び合いを促進することなどを目的として、様々な授業形態においてグループワークが取り入れられているものの、グループワークが上手く機能しない、楽しんでやっているが学習が浅い、教員がどこまで介入して良いかわからないなどといった声に応えるため、グループワークを効果的に行うために教員が身につけておきたいファシリテーションスキルを学ぶことを目指し、杉田先生のレクチャーといくつかのワークセッションにより体験的に学び身につけることができる研修となりました。

参加者のアンケートからは「明日にでも使える」技法について学ぶことができました」、「知識を一方向的に伝える形の講義になっている物理（力学等）の授業にALをいかに導入するかのヒントになりました」などという声があり、参加者満足度が非常に高い研修となりました。

（山本 堅一）

写真1 杉田先生指導の下、アイスブレイクを行う様子



写真2 ワークセッション中の様子

## 総長室事業推進経費プロジェクトによる北大教育改革に係る 研究成果発表ワークショップを開催

本学では、教育改革の取組みの一環として、総長室事業推進経費によるプロジェクト研究が公募されており、2014年度から研究成果を報告するためのワークショップを開催しています。2016年度は6月8日（水）情報教育館3階のスタジオ型多目的中講義室において開催しました。様々な方面から北大の教育改革に取り組んできた各プロジェクトの研究成果を共有し、参加者との議論を通じて更なる発展の可能性を探り、全学的な教育改善を推進することを目的としました。表1のとおり11名が各プロジェクトの成果報告を行い、12部局から37名の教職員が参

加するワークショップとなりました。

各プロジェクト代表者からの報告後は参加者全員で全体討論を行い、成果を全学の教育改革につなげる方法などについて議論が交わされました。

参加者アンケートからは「てきぱきと進んで、緊張感があったので良かった」、「多くの教員に聞いてほしい。デジタルコンテンツ化すれば良いと思った」などといった意見が出ていましたが、諸事情から2016年度は募集されないことになった当該プロジェクトについて惜しむ声も多かったです。

(山本 堅一)

表1 ワークショップの発表者と研究題目（報告順）

発 表 者	研 究 題 目
文学研究科 眞嶋 俊造 准教授	研究者の専門職倫理としての研究倫理の教育コンテンツ開発と、ICTを活用した発信型オープン教材（日本語版・英語版）作成
メディア・コミュニケーション研究院 伊藤 直哉 教授	全学教育フランス語におけるICT活用反転授業実現に向けた教材・教授法開発
高等教育推進機構 鈴木 誠 教授	高校・大学・社会をシームレスに接続する北大版コンピテンシーの開発
メディア・コミュニケーション研究院 高見 敏子 准教授	グローバル人材育成に資する英語多読多聴の自律学習を促進するための諸方策
国際本部（現：東北大学准教授） 妙木 忍 特任助教	超短期受入教育プログラムによる海外協定校との持続発展的關係構築に関する調査研究
工学研究院 小林 幸徳 教授	海外の交流大学との協働教育プログラムにおける授業運営の効果的な枠組み（フレーム）に関する実証研究
理学研究院 Helena Fortunato 准教授	English Learning for Sciences, Agriculture and Engineering (ELSAE)
法学研究科 水野 浩二 教授	英語による日本法教育 ——標準授業案と反転授業の研究
高等教育推進機構 多田 泰紘 特定専門職員	スタディ・スキルを身につけるための自習用補助教材の開発及び製作
高等教育推進機構 亀野 淳 准教授	北大生のジェネリックスキルの把握と学習・生活状況、成績との関連に関する定量的研究
メディア・コミュニケーション研究院 河合 剛 教授	MOOC (massive open online course) for PML (pre-matriculation learning)



写真1 新田理事（教育改革室長）の挨拶

写真2 研究代表者による発表の様子

## 第29回北海道大学教育ワークショップを開催

本学では毎年、着任後5年以内の教員を対象とした宿泊型の新任教員研修を実施しており、今回は6月17日（金）から18日（土）の2日間、北広島市にある北広島クラッセホテルを会場に開催しました。学内13部局から21名の参加者が4つのグループに分かれ、各グループで一般教育演習の新たな授業を提案し、表1のプログラムに沿ってシラバスを作成し、本ワークショップのテーマである「アクティブラーニング型授業の設計」について学びました。

シラバスの作成にあたっては、「講義題目・目標の設定」「授業方略」「学習評価」の3つのセッションをそれぞれレクチャーとグループ討議、発表とフィードバックを1セットとして行いました。また、ワークショップではシラバス作成以外のセッションとして、参加者から事前に挙げられた授業に関する困っていることをディスカッションするショート

セッションや各自のシラバスを校正する時間も取りました。シラバスの校正は、世話人として参加している高等教育推進機構の教員が添削を行い、参加者は添削に基づき再校正をし、最後に世話人が確認して返却しました。

参加者アンケートによると「他の教員と交流できた点や授業の工夫等に関する具体的な事例を知ることができたので良かった」「具体的にアクティブラーニングを進めるポイントが分かった」「エクセレントティーチャーの講演は非常に興味深く、参考になりました」などという意見があり、満足度も5件法で平均値4.57と非常に高く、参加者にとって実り多い研修となりました。アンケート結果を踏まえ、参加者により深い学習をしていただけるようなワークショップにできるよう、引き続き検討していきたいと思えます。（山本 堅一）



写真1 エクセレントティーチャー受賞経験者による講演



写真2 最終発表時の質疑応答の様子

表1 第29回北海道大学教育ワークショッププログラム

2016年6月17日(金)		2016年6月18日(土)	
8:30	受付開始(高等教育推進機構 情報教育館3F スタジオ型多目的中講義室)	6:30~	朝食
8:45	開会挨拶 卯和順総長補佐	8:30	各グループ修正
9:00	バス出発【オリエンテーション(FDの意義,自己紹介)】	9:00	《個人提出課題》参加者のシラバス再提出
10:00	北広島クラッセホテル到着	9:00	レクチャー3「成績評価」(細川敏幸)
10:10	オリエンテーション	9:30	グループ討議「成績評価」
10:50	レクチャー1「講義題目・目標の設定」(山本堅一)	10:30	休憩
11:20	グループ討論「講義題目・目標の設定」	10:45	作成したシラバスの発表
12:20	昼食休憩	11:40	講評
13:20	中間発表「講義題目・目標の設定」	11:50	レクチャー4「教育倫理」(細川敏幸)
13:50	《個人提出課題》参加者のシラバス校正作業	12:00	《個人提出課題》参加者のシラバス返却
14:15	ディスカッション「授業に関するQ&A」	12:00	修了証書授与式
15:00	休憩,シラバス提出	12:20	バス出発【参加者・世話人の感想】
15:20	レクチャー2「授業方略」(山田邦雄)	13:30	札幌駅到着,解散
15:50	グループ討論「授業方略」		
17:20	中間発表「授業方略」		
18:00	夕食休憩		
19:00	《個人提出課題》参加者のシラバス返却		
19:00	エクセレントティーチャー受賞経験者による講演		
19:45	懇親会		

## 講演会「第3期中期目標・中期計画からみる 今後の国立大学の方向性」を開催

6月22日(水)16時00分から90分間、学術交流会館において、文部科学省高等教育局国立大学法人支援課企画官の吉田光成様を招き「第3期中期目標・中期計画からみる今後の国立大学の方向性」と題した講演会を開催し、11大学から109名の教職員の方にご参加いただきました。

本講演会は、本学が毎月行っている部局長研修の一環として行ったもので、通常は本学の部局長のみ

を対象としているところを全国国立大学の管理職にもご案内して開催しました。

講演会は第3期中期目標・中期計画の期間中における国立大学の方向性について、参加者との議論も交えながら行われ、講演会終了後には会場を移動して情報交換会も開催され、参加した各大学の動向などに関する情報共有や参加者同士の交流が見られました。(山本 堅一)



写真1 講演会中の様子

写真2 新田理事から講演者への質問の様子

## 学生の思考を深め、 発言を促すための問いかけと場づくりワークショップを開催

6月23日(木)16時30分から120分間、北図書館西棟2階のセミナールームにて講師に滋賀県立大学の木村裕先生を招き「学生の思考を深め、発言を促すための問いかけと場づくりワークショップ」を開催し、6大学から26名の教職員にご参加いただきました。

本ワークショップは、授業中は学生に質問をしても反応がない、授業終了後であれば質問に来るのに授業中は質問が出ないなどといったよく問い合わせがある教員の悩みを解決するために開催したもので、木村先生から問いかけそのものの意義や作り方

などのレクチャーがあった後、参加者同士でグループを作成し、学生が発言しやすい時と反対にしばらくの時について挙げ、それはなぜなのかを考えるといったワークセッションを行い、学生からの発言を引き出す問いかけの作り方について体験的に学びました。

参加者のアンケートからは「ふだん意識せずに進めがちな授業を意識的にふり返る良い機会になりました」「「質問」と「発問」の違いを分かるようになりました」などという声があり、効果的な研修となりました。(山本 堅一)

写真1 木村先生による講演の様子

写真2 ワークセッション中にグループから質問を受ける木村先生

## 講演会

### 「英語によるアカデミックプレゼンテーションの基礎」を開催

6月30日(木)14時45分から90分間、フロンティア応用科学研究棟のセミナールームにて講師に株式会社トムのPeter Lambert氏を招き、「英語によるアカデミックプレゼンテーションの基礎」を開催し、5大学から33名の教職員にご参加いただきました。

本講演会は、英語でプレゼンテーションを行う時の注意点やいくつかの発表スタイルについて講演があった後、参加者が事前に準備してきた簡単な発表用スライドを用いて早速実践してみるという内容で

進められました。実践中は講師が一人一人に丁寧に助言をして回っており、参加者にとって貴重な機会になったと思われます。

参加者のアンケートからは「講師が各自のレベルを見定めて質問、声かけを調整してくれた」「演題の準備にやや時間がかかりましたが、プレゼンテーションの良い練習になりました」などという声があり、有意義な講演会となりました。

(山本 堅一)

写真1 講演の様子

写真2 参加者の実践時間に助言をして回るPeter氏

## ループリック評価表作成ワークショップを開催

7月8日(金)16時30分から120分間、高等教育推進機構S講義棟S5講義室において「ループリック評価表作成ワークショップ」を開催し、5大学から31名の教職員にご参加いただきました。

本ワークショップでは、授業において学生の様々なパフォーマンスを評価し即座にフィードバックすることで学習の指針や動機付けとさせるため近年注目を集めているループリック評価法について、その基本的知識に関する講演があった後、参加者が実際に使用するためのループリック評価表を作成し、他の参加者からのフィードバックを基にブラッシュアップを行うという作成重視の研修として行われました。

参加者のアンケートからは「評価観点を洗い出し、段階付けの方法を考える過程、普段、何となく行っていた自分の評価の視点を言語化することができました」「他のメンバーの方々からいろいろな意見を聞いてとても参考になりました」などという声があり、有益な研修となりました。

(山本 堅一)



写真1 講演の様子



写真2 参加者が作成したループリックについてグループで意見交換する様子

## 英語発音力講座を開催

7月9日(土)と11日(月)の2日間、株式会社プロンテストの奥村真知代表取締役を講師に招き、高等教育推進機構において「英語発音力講座～正しい発音から始める英語力アップ～」を開催し、2日間で2大学から95名の教職員にご参加いただきました。

本講座は、母音・子音の正しい発音を身につけることでリスニング力の向上やネイティブスピーカーに聞き取ってもらえる発音ができることを目指して開催しており、毎年教員のみならず職員からも申し込みが殺到する大人気講座となっています。参加者は手鏡を使って自分の舌の動きを確認したり、講師の奥村氏から助言をもらったりすることで、それぞれの発音を着実に身につけていきました。

参加者アンケートからは「今回のセミナーを通じて勉強の方法が少し分かりました」「発音をきちんと学んだ記憶がなく、体系的でわかりやすかった」「こちらの状況を見定めて柔軟に進み具合を対応して頂き、余裕を持ってついていけました」などと、評判の良い講座となりました。

(山本 堅一)

写真1 参加者同士の学び合いに助言をして回る奥村氏

写真2 一人一人の発音を確認する様子





# 教育評価 EDUCATIONAL EVALUATION

## 北海道大学卒業生調査2015の結果

大学教育で身につけた能力と社会で求められる能力との関連を探ることを目的として、2015年10月に実施した本学の学部卒業生調査の結果について、その一部を紹介します。調査対象は、調査に参加した8つの学部(教育学部, 法学部, 経済学部, 医学部(医学科), 医学部(保健学科), 歯学部, 農学部, 獣医学部, 水産学部)の、卒業後5年, 10年, 15年の卒業生です。今回はその全体の傾向についてみていきます。

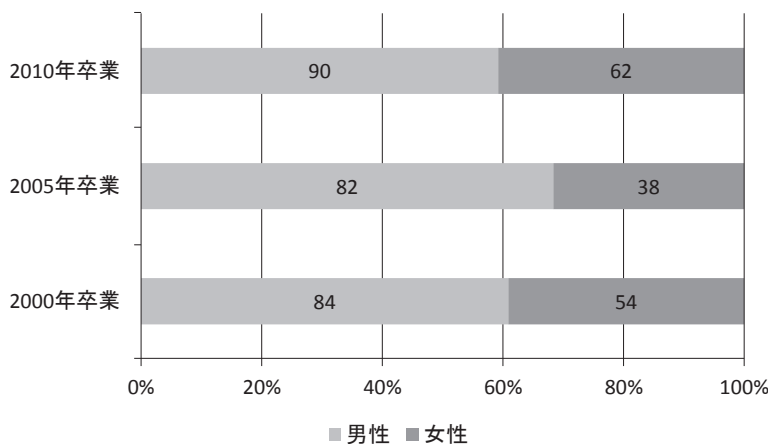


図1 卒業年別男女比

### 回答者の属性

卒業年別の男女比は図1のとおりとなっています。

### 学生時代について能力の自己評価

次は、大学での授業に「熱心に取り組んだグループ」と「熱心に取り組まなかったグループ」に分け、それぞれのグループの「学生時代について能力の自己評価」の平均値をグラフに表して「全学教育」と「専門科目(実験除く)」の2つについてみていきます(図2, 3)。

「全学教育」,「専門科目(実験除く)」ともに、「ストレスに対応する力」以外の項目は全て「熱心に取り組んだグループ」の自己評価が高いことがわかります。これは、全体の平均値ですが、学部によっては、「人間関係の構築力」が「熱心に取り組まなかったグループ」のほうが自己評価が高いという逆転現象がみられるところもありました。能力項目全体において、「全学教育」よりも、「専門科目(実験除く)」のほうが「熱心に取り組んだグループ」と「熱

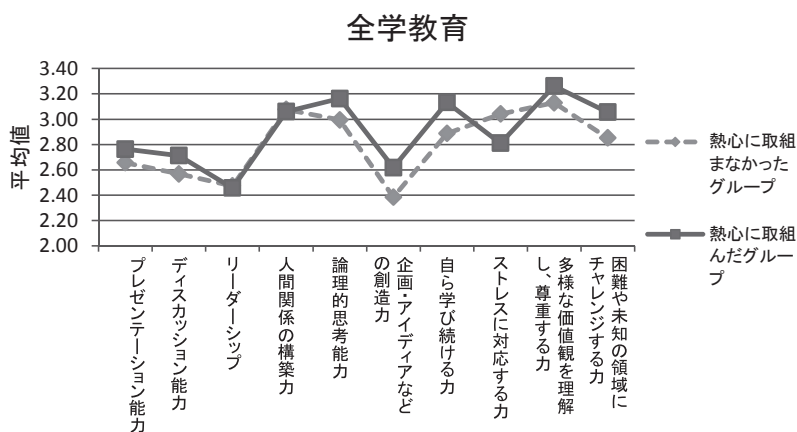


図2 学生時代の取組の熱心度と学生時代に身につけた能力の自己評価の関係(全学教育)

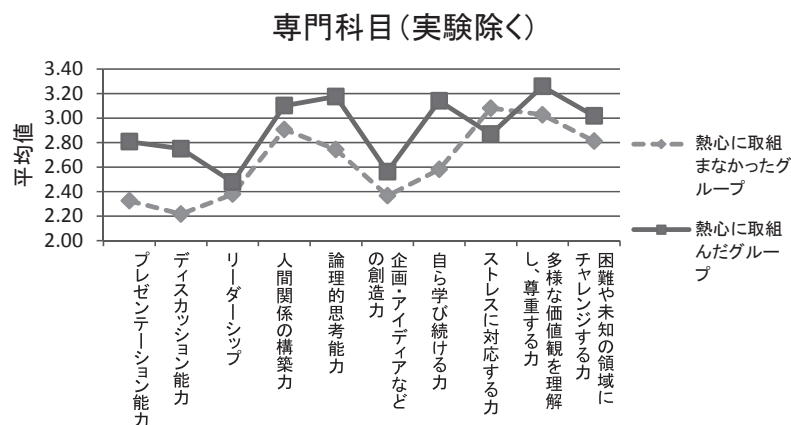


図3 学生時代の取組の熱心度と学生時代に身につけた能力の自己評価の関係(専門科目 実験除く)

心に取り組まなかったグループ」との差が大きく、学部での専門科目のがんばりによって学生時代に能力がついたと感じる学生の割合が高いということが推測されます。

### 現在身についている能力の自己評価

次は、大学での授業に「熱心に取り組んだグループ」と「熱心に取り組まなかったグループ」に分け、それぞれのグループの「現在身についている能力の自己評価」の平均値をグラフに表したグラフです(図4, 5)。こちら「全学教育」と「専門科目(実験除く)」の2つについてみていきます。

「全学教育」,「専門科目(実験除く)」ともに、全ての項目で「熱心に取り組んだグループ」の自己評価が高いことがわかります。ただし、「ストレスをマネジメントする力」と、「人的ネットワークを構築する力」の2項目は、2つのグループの平均値がほぼ拮抗しており、「学生時代に身についた能力」の自己評価と類似の傾向を示しているともいえます。やはり、学部によって若干傾向に差がみられ、「ストレスをマネジメントする力」と「人的ネットワークを構築する力」は「熱心に取り組まなかったグループ」のほうが自己評価が高いという逆転現象がみられるところもありました。「全学教育」よりも、「専門科目(実験除く)」のほうが2つのグループ間での差が大きいという顕著な傾向はみられませんが、学部によっては、専門科目のほうが2つのグループ間の差が大きいところも見受けられました。これに関しては、

### 全学教育

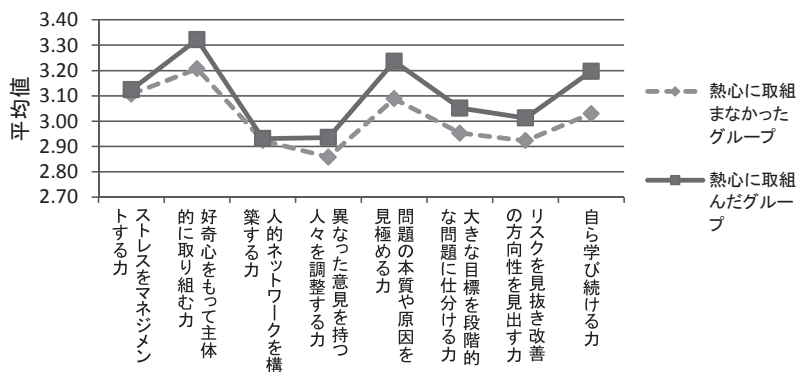


図4 学生時代の取組の熱心度と現在身についている能力の自己評価の関係(全学教育)

### 専門科目(実験除く)

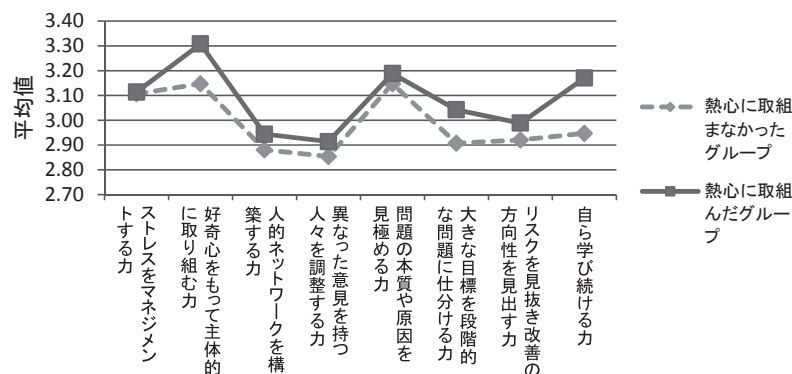


図5 学生時代の取組の熱心度と現在身についている能力の自己評価の関係(専門科目 実験除く)

学部による差が大きいようです。

本調査の各学部データと集計・分析結果は、調査を実施した全ての学部を担当教員が持参し、該当学部と全学の違いをご説明しました。本調査は2016年度も引き続き実施いたします。新たに参加のご希望がある学部がございましたら、IR担当(徳井・宮本)までお知らせください。

(徳井 美智代, 宮本 淳)

## 学生支援 STUDENT SUPPORT

### 経済同友会と連携した長期インターンシッププログラムの実施

今年度より公益社団法人経済同友会が実施する「望ましいインターンシップの枠組み」(<http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2015/160328a.html>)の趣旨に本学も賛同し、参加することになりました。

本インターンシップは経済同友会が2015年4月に「これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待－個人が資質能力を高め、組織を活かした競争力の向上－」(<http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2015/150402a.html>)の中で提唱した学部1、2年生からの長期インターンシップです。

昨年12月に開催された経済同友会教育改革委員会第6回正副委員長会議において企業と大学関係者との具体的な内容の検討を行い、本学からは野村證券2名、富士ゼロックス、三菱樹脂、三井住友銀行、出光興産、花王、JFEスチール各1名、計7社、8名の学生を派遣することとなりました。

4月以降「全学インターンシップ説明会」等を通じ学部1、2年生に周知し、5月12日の締切までに17名(学部1年生7名、2年生10名)の応募があり、書類審査と面接を行い、1年生2名、2年生6名の参加者を決定しました。1、2年生でしたが、応募者の参加意欲も高く、学生の選考に当たっては苦慮しました。残念ながら落選となった応募者の多くは、従来の全学インターンシップに参加しています。

また、プログラムの検討に中心的な役割を果たされた経済同友会教育改革委員会委員の日比谷武氏(株式会社富士ゼロックス顧問)が4月27日(水)に山口総長、新田副学長を表敬訪問されました。

なお、本インターンシッププログラムは5月24日付け日本経済新聞1面トップに「長期インターン産学連携」「大学1年から就業体験」「花王や北大など17校・11社」と大きく報道され、複数の大学関係者からも問い合わせがありました。

(亀野 淳)

### 平成28年度夏季休暇における「全学インターンシップ」の実施に向けて

キャリアセンターと共同で、全学教育科目として「全学インターンシップA・B」を開講していますが、今年度についても夏季休暇を中心とした実施に向け、学生と企業の希望のマッチング、事前研修などを行っています。おおよそのスケジュールは表1のとおりです。

まず、4月18日と20日にクラーク会館講堂で「全学インターンシップ説明会」を開催しました(写真1)。この説明会にはインターンシップに関心のある425名の参加がありました。これは前年度の279名の1.5倍以上です。本説明会では、まず昨年度に全学インターンシップに参加した理学部4年中谷操希さん(インターンシップ先：国立研究開発法人産業

技術総合研究所)、経済学部4年荒木里美さん(同：株式会社北洋銀行)、法学部3年平家勇大さん(同：株式会社ディスコ)に体験談をお話いただきました。その後、担当教員である高等教育推進機構の亀野淳准教授から制度の概要、スケジュール、手続き、心構えなどについて説明をし、キャリアセンター川上あきインターンシップ・マネージャーから具体的な手続きについて説明がありました。

さらに、今年度はインターンシップ希望学生に対する意識の醸成を図るため、4月27日にキャリアセンターと共催で「インターンシップではじめる!! 就活準備ガイダンス」を開催しました(写真2)。インターンシップが就活や就職後の仕事とどのように

つながっているのかなどについて、インターンシップ経験のある本学卒業生や採用コンサルタントをお招きし実施しました。具体的な内容は表2のとおりです。

また、6月6日と20日にはキャリアセンターと共催で「インターンシップガイダンス」を開催しました(写真3)。本ガイダンスではインターンシップを実施している7社(JICA(国際協力機構), エイチ・アイ・エス, 日糧製パン, ノベルズ, 花王, 東京海上日動火災保険, 北海道テレビ放送)の担当者をお招きしました。この中では、インターンシップの具体的な内容, 受入側の考えなどをパネルディスカッションと個別質問で実施しました。

その後, 6~7月にかけて, 参加希望学生と企業等のマッチングを行い, 7月末現在延べ222名の参加が決定しています(表3)。

参加が決まった学生に対しては7月6日, 12日, 13日, 19日(函館キャンパスは7月20日)に講義形式の事前研修を実施し, その後, 1名あたり10分の個人面談も実施しました。この事前研修や個人面談では, インターンシップ先の企業・団体や業界等の研究を行うとともに, インターンシップを通じて検証したい仮説をインターンシップ前に設定し, インターンシップを通じてその検証を行う予定です。同時に, 学生はインターンシップ先の企業等に対して連絡を取り, 札幌近辺の場合は事前に訪問し, 打ち合わせを行っています。仮説の検証や学生自らの連絡・打ち合わせの実施は, 1~2週間という短期間のインターンシップの効果をより高めるため, 北大独自の方式となっています。

これらを経て, 参加学生はそれぞれの企業・団体で夏季休暇中にインターンシップ実習を行う予定です。

インターンシップ終了後には, 1ヶ月以内に研修成果レポートを各自提出するとともに, 10月28日には, 受入企業にも参加していただき, 参加学生の「インターンシップ成果発表共有会」を開催し, インターンシップの成果を共有する予定です。(亀野 淳)



写真1 「全学インターンシップ説明会」の様子

写真2 「インターンシップではじめる!! 就活準備ガイダンス」の様子



写真3 「インターンシップガイダンス」の様子

表1 平成28年度 全学インターンシップ スケジュール

4月18日(月), 20日(水)	全学インターンシップ説明会
4月18日(月)～5月27日(金)	参加申込登録(学生)
4月上旬～5月31日(火)	受入申込登録(企業)
4月27日(水)	「インターンシップではじめる!!就活準備ガイダンス」
6月6日(月)～10日(金)	参加希望企業名登録(学生)
6月6日(月), 20日(月)	「インターンシップガイダンス」
6月14日(火)	第1次マッチング結果の通知
6月22日(水)～28日(火)	第1回先着マッチング (第1次マッチングがされなかった学生と企業のマッチング)
7月6日(水), 12日(火)	事前研修①実施
7月11日(月)～15日(金)	第2回先着マッチング
7月13日(水), 19日(火)	事前研修②実施
7月20日(水)	事前研修①②(函館キャンパス)実施
7月21日(木)～8月5日(金)	個人面談(学生と担当教員)
7月27日(水), 28日(木), 29日(金)	自己分析テスト(PROG)の実施
夏季休暇期間	インターンシップ参加(学生)
インターンシップ終了後1ヶ月以内	研修成果レポートの提出(学生)
10月28日(金)	「インターンシップ成果発表共有会」(学生, 企業)

表2 「インターンシップではじめる!!就活準備ガイダンス」プログラム

日 時：平成28年4月27日(水) 18:20～20:30
対 象：全学年(主に学部3年生, 修士1年生など2018年3月卒業見込みの学生)
◆ 内容 ◆
【第1部】 北大生のインターンシップ事情 民間企業, 官公庁, 公募型, 大学経由型…北大生のインターンシップ事情について簡単にポイントを解説します。
【第2部】 インターンシップと就職活動リアル①～教員とインターン経験若手社会人OBOGが語る!!～ インターンシップに行ってもうどうだった?どんな効果があるんだろう。どう今後の自分に生きるのか。実際に北大経由でインターンシップに行った社会で活躍する先輩から, リアルな声を語っていただきます。
* 卒業生
・株式会社ダイナックス 川向 亜美 氏 (2015年3月北大工学部卒, 学部3年生時にダイナックスのインターンシップに参加)
・大丸藤井株式会社 内田 美貴 氏 (2015年3月北大文学部卒, 学部3年生時に北大附属図書館のインターンシップに参加)
* インタビュアー：インターンシップ担当教員 亀野 淳 准教授
【第3部】 インターンシップと就職活動リアル①～企業の採用コンサルタントが集結!!～ なかなかわからない企業側の思惑。企業がインターンシップを行う目的は?実際, 就活に有利・不利などあるのか…多くの企業の採用活動をコンサルする企業が集結し, 企業の生の声をお届けします。
* パネリスト
株式会社ジェイ・ブロード 北海道支社長 前田 健郎 氏(就職Walker Net)
株式会社ディスコ キャリタス営業課課長 松岡 孝史 氏(キャリタス就活)
株式会社マイナビ 総合企画営業統括部統括部長 池本 博則 氏(マイナビ)
株式会社リクルートキャリア 東日本地域活性営業部部長 平澤 義博 氏(リクナビ)

表3 全学インターンシップ参加者数

① 学部

学年 学部	1年	2年	3年	4年 以上	計
文学部	2	4	33	1	40
教育学部			3		3
法学部	1	6	25		32
経済学部	1	4	30		35
理学部			7		7
医学部			5	1	6
薬学部		1	1	2	4
工学部		6	17	4	27
農学部			11	2	13
獣医学部				2	2
水産学部			14	1	15
総合文系	1				1
総合理系	3				3
計	8	21	146	13	188

② 大学院

課程・学年 研究科・学院	修士 1年	修士 2年	計
文学研究科	1	1	2
教育学院	1		1
法学研究科	1		1
経済学研究科	3		3
理学院	5		5
農学院	6		6
水産科学院	1		1
国際広報メディア・観光学院	6		6
環境科学院	2		2
生命科学院	6		6
総合化学院	1		1
計	33	1	34

## 特別講義「キャリアデザイン」開講

全学教育の特別講義「キャリアデザイン」を開講しています。

本講義は、平成6年度より学部1年生を対象としたキャリア教育の一環として開講しています。入学後のできるだけ早期に自らのキャリアを考えるきっかけを与え、自らの目標に向かって前向きに勉学するように促すことを目的に、社会の第一線で活躍している方々の学生生活から現在に至るまでの体験談、キャリア形成についての講義、グループワークなどのアクティブ・ラーニングを通じて、大学で「学ぶこと」と社会で「働くこと」の意義や関連性を考え、今後の自らのキャリアを考えるきっかけとすることができるような内容となっています。

今年度は、1年生を中心に40人が受講しており、表1のとおり、担当教員のほか、小柴キャリアセンター長が講義をしました。さらには、外部講師として、民間企業の立場から日比谷武氏（富士ゼロックス顧問）、マスコミ関係者としてNHKの小林史朗氏（企画総務部人事担当）と浅川雄喜氏（放送部記者

職）をお招きし、お話をいただきました。日比谷氏は教養教育、とりわけ読書の重要性、浅川氏は大学時代の様々な経験や社会人になってからの勉強の重要性について強調されていました。学生からも積極的に多くの質問が出されました。

また、今年度は「7つの習慣」で有名なスティーブン・R・コヴィーの考えをもとに大学生向けの講義をフランクリン・コヴィー・ジャパン株式会社の鈴木博美氏に2回に分けてしていただきました。

また、グループワークでは、受講生を6～7人、6グループに分け、「○○として活躍するために必要なこと」（○○には各グループで調査対象とした職業が入ります）というテーマで職業人へのインタビューなどを実施し、プレゼンテーションを行いました。グループが対象とした職業は、宇宙飛行士、看護師、JICA職員、高校教師、ツアーコンダクター、青年海外協力隊でした。

さらに、昨年度より自己分析の一環としてPROG（Progress Report on Generic Skills）を実施し、

学生のコンピテンシーとリテラシーを定量的に測定しました。この測定結果を学生自身に返却し、今後の学生生活の目標設定の参考にしてもらうとともに

に、学生生活との関連性について多面的に分析を行う予定です。(亀野 淳)



写真1 日比谷氏の講演の様子

写真2 受講生の様子

表1 2016(平成28)年度 キャリアデザイン スケジュール

① 4月14日(木)	○ オリエンテーション
② 4月21日(木)	○ 受講にあたっての基本事項 ○ キャリア概論Ⅰ(亀野講義)
③ 4月28日(木)	○ 自己分析(PROG)の実施
④ 5月12日(木)	○ キャリア概論Ⅱ(小柴キャリアセンター長講義)
⑤ 5月19日(木)	○ 自己分析(PROG)の返却, 解説
⑥ 5月26日(木)	○ スティーブン・R・コヴィー「7つの習慣」Ⅰ (フランクリン・コヴィー・ジャパン株式会社 鈴木 博美 氏)
⑦ 6月9日(木)	○ 今後の進め方について ○ 外部講師による講義やグループワークについて ○ グループワークⅠ: グループの編成分け, 討論開始
⑧ 6月13日(月)	○ グループワークⅡ: 調査及び討論
⑨ 6月16日(木)	○ スティーブン・R・コヴィー「7つの習慣」Ⅱ (フランクリン・コヴィー・ジャパン株式会社 鈴木 博美 氏)
⑩ 6月23日(木)	○ 外部講師Ⅰ: 日比谷 武 氏(富士ゼロックス株式会社顧問)
⑪ 6月30日(木)	○ グループワークⅢ: 調査及び討論
⑫ 7月7日(木)	○ グループワークⅣ: 調査及び討論
⑬ 7月14日(木)	○ 外部講師Ⅱ: 浅川 雄喜 氏(NHK札幌放送局放送部記者) 小林 史朗 氏(NHK札幌放送局企画総務部人事担当)
⑭ 7月21日(木)	○ グループ発表
⑮ 7月28日(木)	○ 全体のまとめ

## 科学技術コミュニケーション オープンエデュケーションセンター CoSTEP部門

### 第88回サイエンス・カフェ札幌「カエルの先生時計作りの達人に迫る ～時の小宇宙を生み出す独創性の解明～」開催報告

本機構 オープンエデュケーションセンター 科学技術コミュニケーション教育研究部門（以下、CoSTEP）は、2016年6月12日（日）に、本機構教員 鈴木誠教授と、北海道深川市出身の独立時計師 菊野昌宏氏をゲストにお招きして、第88サイエンス・カフェ札幌「カエルの先生 時計作りの達人に迫る～時の小宇宙を生み出す独創性の解明～」を開催しました。140の方が参加し、満員御礼となったカフェの聞き手は、種村剛（CoSTEP特任助教）が務めました。以下、その概要を報告します。

#### カフェのテーマ

鈴木教授は、本学の一般教育演習（フレッシュマンセミナー）で「蛙学への招待」を開講しています。この講義の特徴は、蛙の生態・形態などを学ぶことを通じて、文系理系を問わず、将来生きていく上で必要となる「問題解決の手法」を体験・マスターする点にあります。

菊野氏は、自動割駒式和時計を腕時計サイズとして制作した「不定時法腕時計」が認められ、2013年に、世界的な組織である、独立時計師協会から日本人初の独立時計師に認定されました。2015年には新作となる「和時計改」を発表しています。

不定時法とは、一日を昼と夜に分け、それぞれを等分する時刻制度です。特徴は、季節や昼夜によって時刻の長さが伸び縮みする点です。日本では、明治の初期までこの時刻制度が使われていました。和時計とは、不定時法を表現するために日本で独自に発展した

写真1 ゲストの菊野昌宏氏（左）と鈴木誠教授（右）

時計です。

このサイエンスカフェのテーマは独創性と問題解決能力の関係です。では、この二つはどのように関連しているのでしょうか。今までにないものを作り出す際には、トラブルがつきものです。トラブル、すなわち問題を一つひとつ解決していくからこそ、実際に新しいものを生み出すことができるのです。つまり独創性と問題を解決するための能力は密接に関連していることがうかがえます。カフェでは、菊野氏の独創性の秘密を、問題解決能力の育成に携わっている鈴木教授に解き明かしていただくことにしました。

#### 独創性と問題解決能力

第一部では、菊野氏が手作業でつくった腕時計の独創性を紹介します。このために「ホンモノ」の作品を、会場にもってきていただき、ディスプレイに映して観客の皆さんにも見ていただきました。菊野氏の作品の精妙さと美しさに、会場からは感嘆の声があがりました。菊野氏が2011年に制作した腕時計としての「和時計」は、江戸時代に構想された不定時法を表現する機構を組み込んでいました。しかし、すでに江戸時代に考え出されていた機構を使うことに不満を覚えた菊野氏は、新しい機構を自ら考えだそうと試みました。そのヒントはマジックハンドです。マジックハンドのリンク機構を応用することで、今まで考えられていなかった新たな機構を生み出したのです。

第二部は、動画を使った「蛙学への招

写真2 模型を使って機構を説明する菊野氏



待」の講義紹介から始まりました。紹介に使われた動画は朴炫貞 (CoSTEP特任助教) が、カフェのために制作したものです。蛙学で行われている問題解決能力育成の要点を「ホンモノとの出会い」「五感の鋭さ」「情報収集・選択」「観察力」「手作業の重要性」「こだわり・信念」「全体を見通す」「メタ認知」「再定義力」の9点にまとめました。このポイントを手がかりにして、菊野氏と鈴木教授の対談が行われました。

鈴木教授は、若冲の絵を紹介しながら「正確に対象を観察することは、すべてのことの基礎・基本になるのではないか」と問いかけ

写真3 若冲の絵画を紹介する鈴木教授

ました。菊野氏はこれに対して、江戸時代のゼンマイを徹底的に観察することで、当時の職人がどのような道具を使い、どんな手順でゼンマイを作り上げたのかまで把握することができると、答えました。

菊野氏はさらに、一人で全ての時計制作の工程を行うことで、一つひとつの部品が、時計全体でどのような役割をしているのかを理解できるようになると語りました。全体を見通しているがゆえに、時計が動かなくなってしまう問題の原因がどこにあり、どのように直せばよいのかを把握することができるのです。

このように、二人の対談を通じて、独創性と問題解決能力の接点が、明らかにされました。

第三部は、会場との質疑応答です。次はどんな時計をつくってみたいですか？ なぜ講義で蛙を使うのですか？ などの、会場からの質問に、お二人はユーモアを交えながら、答えていきました。同じ質問に対して、二人の異なる観点からの回答や、回答に対するコメントは、質疑応答をより深めていたように思われました。

カフェ終了後も和やかな雰囲気の中で、菊野氏の時計を間近で見学する人や、鈴木教授に質問する人が多くいることが印象的でした。

## アンケート結果

CoSTEPはサイエンスカフェ終了後、参加者にアンケート調査をおこなっています。アンケートの自由回答を見ると、菊野氏と鈴木教授が時計と蛙、機械と生命、全く違う対象を扱っているにもかかわらず、「独創性と問題解決能力」について共通の認識をもつことが、参加者にも伝わっていることがうかがえました。カフェの満足度も高い結果になりました(図1)。これらのアンケート結果を参照し、CoSTEPは今後も様々な対話の場を企画し、市民と専門家の橋渡しを続けていきます。

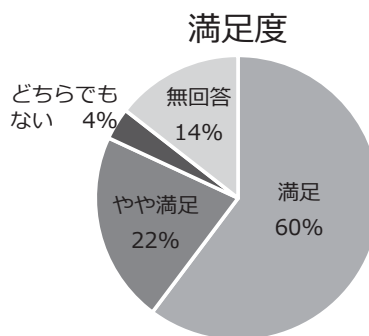


図1 カフェの満足度 (回答数84)

## アンケート自由回答から

- ・全く違う2つのもの・ことから通ずる点に対談で見出していくことは聞いていて非常に面白かったです。(20代 女性)
- ・お二人の対談、とてもおもしろかったです。魅力的なプロ同士の話は、ジャンルが違って、通じるところがありますよね。異分野格闘おもしろかったです。片方はパーツを組み立てていく仕事、片方は解剖して分解していく仕事、両端のようで紙の表裏のような作業ですね。考えることができました。(40代 女性)
- ・こういったサイエンスカフェがあるのを今回初めて知りました。無料で場所もアクセスしやすく、市民に開かれた参加しやすい雰囲気でもとても良いと思いました！ 今後も楽しみにしています！(20代 女性)

(種村 剛)

## 新任紹介 INTRODUCTION OF NEW STAFF

### 着任のご挨拶

高等教育推進機構 高等教育研究部

高等教育研究部門 特任准教授 Heewon Lee (イ・ヘウォン)

I am Heewon Lee, a research professor at Center for Teaching and Learning (CTL) in Seoul National University (SNU) in Korea. I have been working here since June as a visiting professor at Institute for the Advancement of Higher Education (IAHE), and will be staying here for three months.

I am very familiar and comfortable with Hokkaido University (HU), because the CTL in SNU and IAHE in HU have been regularly interacting with each other through international conferences since 2006. As a visiting professor in IAHE, I have been particularly drawn to the comparative analysis concerning the learning processes of undergraduate students at HU and SNU. Japan and Korea have a similar yet distinct culture, so I am particularly interested in how Japanese and Korean students differ in terms of their attitude or perception towards the learning process.

Since my arrival, I have also been inspired by the working attitude of the professors at HU. Whenever I participate in seminar or workshop with fellow professors, I am always impressed with the way in which professors at HU listen carefully to others' presentations and ask very detailed and specific questions. This makes me reflect upon Korea's hasty culture which focuses on the speed of getting things done, without sufficient emphasis on quality.

Once a week, my colleagues in IAHE hold a lunchtime meeting during which we can communicate with each other and share what we have done in last week, which I have also found very interesting. The nature of a professor's work

means that my colleagues and I spend most of our time alone, to the extent that we may not be aware of how our colleagues are doing, including those sitting right next door. To this regard, the lunchtime meetings present a valuable opportunity to discuss weekly affairs, which facilitates communication and helps to bridge the gaps between professors within the department.

On a personal level, I am pleased to be here at HU for a number of reasons as well. Compared with the hot and humid weather in Korea, Hokkaido in summer is cool and breezy, and the warm sunshine is incredibly beautiful. I am very grateful for being able to experience the beautiful weather during summer time here in Hokkaido.

Japanese has always been very difficult for me, despite the fact I had visited Japan on quite a few occasions. However, working here has provided me an opportunity to learn Japanese, and I have started to attend Japanese classes everyday which HU provides for foreign members of its staff. I have become capable of reading signs on the road only after one month of studying Japanese, which is very exciting. Even after I leave HU, I will try to continue learning Japanese and keep up with Japanese culture, and overcoming the language barrier will hopefully help bridge the gap between Japan and Korea.

The three months here in HU will be an unforgettable experience and memory to me. Even though it is quite a short period of time, living abroad is an invaluable gift that allows you to experience and understand other cultures in much more depth. I hope the three months here will help

me become familiar with Japan in this way, such

that it will feel like a close and personal friend to me.

## 着任のご挨拶

高等教育推進機構 オープンエデュケーションセンター

科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) 特任助教 西尾 直樹

5月1日付で、オープンエデュケーションセンター科学技術コミュニケーション教育研究部門 (CoSTEP) に特任助教として着任しました。西尾直樹と申します。専門分野は「インタビュー」および「対話の場づくり」です。学生時代から京都市を拠点にしてきたのですが、このたび北の大地へ家族で移住してきました。

私は学生の頃から「科学技術と社会の架け橋」を志し、大学院修士課程を修了後はNEDOフェロースhipに採択され、産学連携コーディネーターとして主に研究会や交流会の開催を担当しました。その一環のプロジェクトとして「研究者図鑑」を立ち上げ、全国津々浦々300日で300人の多様な分野の研究者を映像インタビューで紹介しました。この札幌でも、その時の手法を使った「札幌人図鑑」が、元ラジオパーソナリティーの福津京子氏によって立ち上げられ、1000人を超える札幌の人たちが紹介されています。

NEDOフェロースhip終了後は、研究者へのイン

タビューの仕事を続けつつ、一方で地域活性やソーシャルイノベーションに関心を持ち、京都における官学民連携での新しいまちづくりの取り組みに参加。①京都市未来まちづくり100人委員会では大人数対話手法を活用した委員会の運営事務局、②一般財団法人地域公共人材開発機構では地域や公共セクターを担う実践的人材育成プログラムとしてインタビュー担当講師、③京都府庁NPOパートナーシップセンターでは、府民と行政をつなぐ協働コーディネーターとして、地域活性の現場に直接的に関わり、経験とスキルを構築しました。また全国各地の社会起業の現場を訪ね、創造性と社会性を兼ね備えた人たちのネットワークを構築してきました。

今後は、CoSTEPでの教育、実践、研究活動を通じて、この10年で蓄積してきた「科学技術と人」「地域・社会変革」の2つを統合させ、研究者の知見と地域・社会活動を実践している人達の行動力の融合を目指していきたいと考えています。

## 着任のご挨拶

高等教育推進機構 高等教育研究部 高等教育研究部門 講師 岩間 徳兼

2016年4月に高等教育推進機構高等教育研究部門に着任した岩間徳兼(いわまのりかず)です。心理・教育測定学を専門としています。簡潔に表現すれば、人間の心理特性(態度、好み、性格など)や学力・能力について数値を用いた考察を行う学問です。

前職では、公的試験を運営する組織で研究員を務め、試験の理論と実務について学んできました。「試

験の理論」という言葉は耳慣れないかもしれませんが、実は身近なところで利用されているものです。例えば、語学試験のTOEICや医学、歯学、薬学の共用試験におけるCBTは、試験の理論を利用して運営されています。それにより、試験の質の管理が容易になり、異なる実施回の試験結果の比較も可能になっています。試験の公正性や公平性を担保する

のに試験の理論は貢献しています。

今、高等学校と大学のスムーズな接続を目指して、大学教育を変えようという大きな動きがあることはご存知でしょうか。その一環として、入学者選抜の仕組みにも改革が求められています。現在行われているいわゆるセンター試験は平成32年度に大学入学希望者学力評価テスト（仮称）へ切り替わることが予定されており、それに合わせて個別入学者選抜試験の役割やあるべき姿について各大学において検討が進められています。北海道大学での検討において、

これまで自分が得てきた知識や経験を生かしていけるのではないかと考えています。北海道大学で学び世界の未来を担っていく人材の発掘に貢献できれば幸いです。

着任以前に北海道大学札幌キャンパスを訪れたのは一度だけでしたが、広大な敷地には緑と水が豊富に存在し、静かで心の落ち着く環境、自由な雰囲気、憧れを感じました。このすばらしい環境の中で思索を深め、教育・研究、さまざまな活動に励んで参ります。

## 日誌 EVENTS, April-July

### 4月

- 3日（行事） 新渡戸カレッジ仮入校プレイスメントテスト
- 4日（会議） 第1回新渡戸カレッジ評価委員会
- 5日（研修） 全学教育科目に係るTA研修会
- 7日（行事） 新入生オリエンテーション、総合教育部ガイダンス
- 8日（行事） 入学式
- 11日（行事） 新入生向け教育情報システム（ELMS）に関するガイダンス
- 12日 全学教育部 第1学期授業開始日
- 12日（行事） 新渡戸カレッジ仮入校合格発表
- 18日（会議） 第1回大学IRコンソーシアム運営委員会（TV）
- 22日（研修） 「クリッカーの使い方入門」研修（理系教員対象）
- 23日～24日（行事） 新渡戸カレッジ第1回対話プログラム
- 25日（会議） 第1回新渡戸スクール教務専門委員会
- 26日（会議） 第1回学生委員会
- 26日（会議） 第1回オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 27日（会議） 第1回新渡戸スクール運営会議
- 28日（行事） 新渡戸スクール入校合格発表
- 28日（会議） 第1回教育改革室会議

### 5月

- 13日（会議） 第1回新渡戸カレッジフェロー交流・研究会
- 13日（会議） 第1回新渡戸カレッジ運営会議
- 13日（研修） 「学習の動機づけを行う授業スキル」ワークショップ
- 14日（行事） 新渡戸カレッジ入校式
- 14日（行事） 新渡戸スクール入校式
- 14日（行事） 新渡戸カレッジ学内合宿
- 14日（行事） 新渡戸スクールプレイスメントテスト
- 14日（講演会） CoSTEP開講式特別講義  
「水族館に奇跡を起こす～科学を「大衆文化」にする逆転の発想～」
- 16日（会議） 第2回大学IRコンソーシアム運営委員会（TV）
- 17日（会議） 第1回全学教育専門委員会
- 18日（会議） 第1回ELMS定例会議
- 19日～20日（会議） 平成28年度国立大学教養教育実施組織会議（香川）
- 20日（講義） 立命館慶祥中学校・高等学校SSH授業「SS研究II」（CoSTEP）
- 20日（研修） 新任教員向け研修「知って活用したい北大の諸制度」
- 23日（会議） 入学者選抜委員会
- 23日（会議） 第2回新渡戸カレッジ評価委員会

- 24日 (会議) 第2回オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 25日 (行事) 第1回新渡戸カレッジ講演会
- 26日 (会議) 第2回教育改革室会議
- 26日 (研修) 「クリッカーの使い方入門」研修 (文系教員対象)
- 27日 (研修) ワークショップ「効果的なグループワークのためのファシリテーション入門」

## ■ 6月

- 4日 (行事) 第1回応用倫理研究会「今、改めて戦争について考えよう ―戦争倫理学入門―」協力 (CoSTEP)
- 5日 (行事) 天塩研究林をフィールドにした子どもむけ写真ワークショップ  
「これが私の森!―光と影でつくる写真の世界―」共催 (CoSTEP)
- 7日 (会議) 第84回教務委員会
- 8日 (研修) 平成27年度総長室事業推進経費プロジェクトによる北大教育改革に係る研究成果発表ワークショップ
- 10日 (行事) 第2回新渡戸カレッジ講演会
- 11日 (行事) 第88回サイエンス・カフェ札幌  
「カエルの先生、時計作りの達人に迫る～時の小宇宙を生み出す独創性の解明～」(CoSTEP)
- 14日 (会議) 第2回全学教育専門委員会
- 14日 (会議) 第1回全学教育専門委員会成績評価結果検討専門部会
- 15日 (会議) 第2回ELMS定例会議
- 17日～18日 (研修) 第29回北海道大学教育ワークショップ
- 18日 (行事) 新渡戸スクールメンター交流会
- 20日 (会議) 第4回大学IRコンソーシアム定時総会 (神戸)
- 20日 (研修) IRシステム データ活用セミナー (神戸)
- 21日 平成29年度AO入試・帰国子女入試学生募集要項公表
- 22日 (行事) 第3回新渡戸カレッジ講演会

- 23日 (会議) 第3回オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 23日 (研修) ワークショップ「学生の思考を深め、発言を促すための問いかけと場づくり」
- 27日～28日 (会議) 第1回高等教育推進機構運営委員会 (持回り)
- 28日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (理系基礎科目)
- 30日 (研修) 英語によるアカデミック・プレゼンテーションの基礎

## ■ 7月

- 1日 (行事) 第4回新渡戸カレッジ講演会
- 2日・3日・8日・9日 (行事) 新渡戸カレッジ第2回グループ・ミーティング
- 4日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (文系基礎科目)
- 4日 (会議) 全学教育科目責任者会議 (外国語科目)
- 4日～6日 (会議) 第2回全学教育専門委員会成績評価結果検討専門部会 (持回り)
- 4日～25日 (行事) 北海道大学公開講座 (全8回)
- 6日 (会議) 第1回新渡戸カレッジ運営会議 教務専門委員会
- 6日～7日 (会議) 第2回高等教育推進機構運営委員会 (持回り)
- 6日～11日 (会議) 第3回全学教育専門委員会(持回り)
- 7日 (会議) 第4回オープンエデュケーションセンター連絡会議
- 8日 (会議) 第1回新渡戸カレッジ校長諮問委員会
- 8日 (会議) 新渡戸カレッジ校長諮問委員会・新渡戸カレッジ評価委員会合同委員会
- 8日 (研修) ルーブリック評価表作成ワークショップ

- |                    |  |           |  |
|--------------------|--|-----------|--|
| 8日・9日・10日・11日 (行事) | 新渡戸カレッジ第2回対話プログラム  | 21日 (会議)  | 第2回新渡戸スクール教務専門委員会  |
| 9日・11日 (研修)        | 英語発音力講座  | 22日 (説明会) | 北海道大学入試説明会(高校教諭対象)   |
| 11日 (会議)           | 第3回新渡戸カレッジ評価委員会  | 23日 (説明会) | 全国国公立・有名私大相談会2016 (大阪)   |
| 11日 (会議)           | 第3回大学IRコンソーシアム運営委員会 (TV)   | 24日 (説明会) | 全国国公立・有名私大相談会2016 (名古屋)  |
| 13日 (会議)           | 第3回ELMS定例会議  | 26日 (会議)  | 第1回教務情報システム専門委員会   |
| 15日                | 平成29年度入学者選抜要項公表  | 27日 (会議)  | 第3回教育改革室会議   |
| 15日 (行事)           | 第5回新渡戸カレッジ講演会  | 27日 (会議)  | 第1回総合教育移行専門委員会   |
| 18日 (説明会)          | 全国国公立・有名私大相談会2016 (東京)   | 28日 (会議)  | 第1回高等教育推進機構学務委員会   |
| 18日 (行事)           | 第153回まちづくり町民講座・サイエンス・カフェ inニセコ<br>「未来は自分で変えられる ードイツのエネルギー自立に学ぶニセコの挑戦」協力 (CoSTEP) | 28日 (行事)  | 北海道立総合研究機構主催子ども向けワークショップ2016サイエンスパーク「シカクでつくるさっぽろマップ」・「さっぽろサイエンスクイズ」出展 (CoSTEP) |
| 19日 (会議)           | 第1回大学院共通教育専門委員会  | 29日 (行事)  | 第6回新渡戸カレッジ講演会  |
| 20日 (会議)           | 第4回全学教育専門委員会   | 31日 (説明会) | 全国国公立・有名私大相談会2016 (横浜)   |
| 21日 (会議)           | 第2回学生委員会   | 31日 (行事)  | 第89回サイエンス・カフェ札幌<br>「働き方にも、いろいろアリ～社会性昆虫に見る組織の持続可能性～」(CoSTEP)                    |
| 21日 (行事)           | 新渡戸カレッジ特別講演会   |           |  |



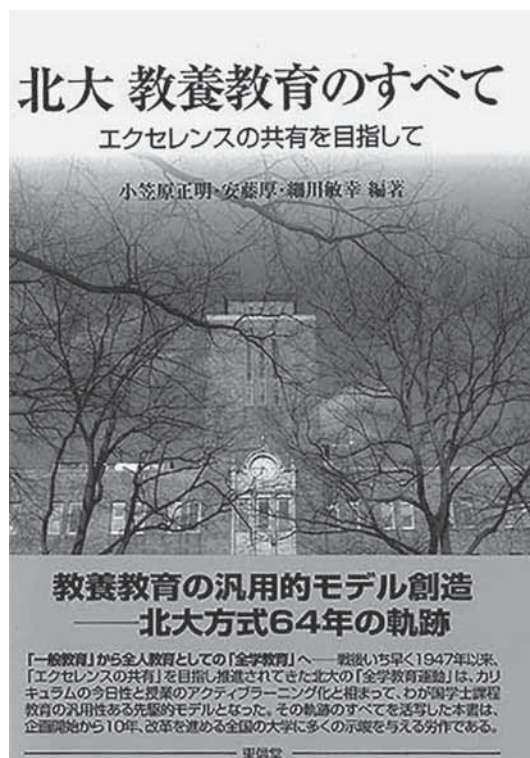
## 行事予定 SCHEDULE, September-December

- |   |  |
|---|--|
| <p>◆9月</p> <p>26 (月) 午後<br/>学部・学科等移行ガイダンス</p> <p>27 (火) 学部・学科等紹介</p> <p>28 (水) 第2学期授業開始日</p> <p>28 (水) ~10月3日 (月)<br/>学部・学科等移行手続き(予備志望調査)</p> <p>28 (水) ~10月4日 (火)<br/>抽選科目の申込期間</p> <p>◆10月</p> <p>6 (木) 抽選科目の結果発表日及び追加申込日</p> <p>7 (金) ~14 (金)<br/>履修届Web入力</p> | <p>24 (月) ~25 (火)<br/>履修時間割確認期間</p> <p>◆11月</p> <p>20 (日) AO入試・帰国子女入試第2次選考</p> <p>◆12月</p> <p>5 (月) ~7 (水)<br/>履修登録した科目の取消し受付</p> <p>12 (月) ~14 (水)<br/>自由設計科目登録変更期間</p> <p>27 (火) ~1月4日 (水)<br/>冬季休業日</p> |
|---|--|

## お知らせ INFORMATION

### 本学の教育制度改革の歴史を綴った「北大教養教育のすべて—エクセレンスの共有を目指して—」が出版される

高等教育推進機構高等教育開発研究部門（現高等教育研究部門）の歴代の部門長である小笠原正明、安藤厚、細川敏幸が編著した、表記タイトルの本が2016年6月に東信堂から出版されました。山口佳三総長をはじめとして新田孝彦副学長、山口淳二副学長、望月恒子副学長など、ここ20年の間に本学の教育制度改革の担当者であった22名の教員が自ら筆を執り、改革の詳細を記述しており、これまでに類のない本となりました。北大の教育改革の底流に脈々と流れる改革の理念、他大学に先駆けた改革の内容、実施の詳細など、追隨する全国の大学に多くの示唆を与える著作です。また、これから教育改革の労を執る教員には必読の本です。どうぞ、ご一読ください。



ニュースレター 2016, No.106 目次

(巻頭言)「社会との対話・協働」に関する研究開発 三上 直之 ……………	1	ルーブリック評価表作成ワークショップを開催 ……	15
TA研修会開催される —180名が修了— ……………	3	英語発音力講座を開催 ……………	16
クリッカーの使い方入門研修を開催 ……………	8	北海道大学卒業生調査2015の結果 ……………	17
学習への動機づけを行う授業スキルワークショップを 開催 ……………	9	経済同友会と連携した長期インターンシップ プログラムの実施 ……………	19
新任教員向け研修「知って活用したい北大の諸制度」 を開催 ……………	9	平成28年度夏季休暇における「全学インターンシップ」 の実施に向けて ……………	19
効果的なグループワークのためのファシリテーション 入門研修を開催 ……………	10	特別講義「キャリアデザイン」開講 ……………	22
総長室事業推進経費プロジェクトによる北大教育改革 に係る研究成果発表ワークショップを開催 ……	11	第88回サイエンス・カフェ札幌「カエルの先生時計 作りの達人に迫る～時の小宇宙を生み出す独創性 の解明～」開催報告 ……………	24
第29回北海道大学教育ワークショップを開催 ……	12	新任紹介 ……………	26
講演会「第3期中期目標・中期計画からみる 今後の国立大学の方向性」を開催 ……………	13	日誌 ……………	28
学生の思考を深め、発言を促すための問いかけと 場づくりワークショップを開催 ……………	14	行事予定 ……………	31
講演会「英語によるアカデミックプレゼンテーション の基礎」を開催 ……………	14	本学の教育制度改革の歴史を綴った 「北大教養教育のすべて—エクセルシオの 共有を目指して—」が出版される ……………	31
		目次・編集後記 ……………	32

編集後記

今号で報告されている教員研修のいくつかに実際に参加させていただきました。記事ではサラッと書かれていますが、どの研修においても充実したトピックが適切なタイミングで扱われ、短時間で多くのことが身につきました。講師を担当する先生方や運営補助をする職員の方々の入念な準備があってこそのものだと思います。活動の先に、学習・研究意欲に溢れた沢山の学生が育っていく様子が見えた気がしました。(海苔)

ニュースレター

(北海道大学高等教育推進機構広報誌)  
通算 第106号

発行日： 2016年 8月31日  
発行元： 北海道大学高等教育推進機構  
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目  
編集委員：◎細川敏幸・鈴木誠・飯田直弘・岩間徳兼  
ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで  
電話 (011)706-7514, FAX (011)706-7521  
インターネットホームページ：  
<http://educate.academic.hokudai.ac.jp/center/index.html>